

建築家の檻

写真：鈴木理重



連載1

Grasshouse

丹下会長は片腕がなくて、残っている右手の五本の指を広げながら、黄色い鬼瓦のような顔で威圧的に話すということであった。

この元代表取締役の五本の指は、すべての人事権をまだしっかりと握りしめ、長男の現社長や、娘婿である副社長の頭越しに、丹下建設のすべての方向性を独裁的に決定するのだそうだ。

曇った晩秋の午後、僕は京王線沿線の場末の中華料理店で、大学の先輩の色川さんに遅い昼飯を奢られた。

「ま、この丹下喜作という爺さんは、ちょっとした白髪鬼といった印象だな。奴のいびつな鉤鼻は、まるで下向きの矢印だ。押しつけがましい会長の性格そのものさ。左腕は戦争中満州にいて、爆弾の破片が刺さったとか、匪賊にやられたとか言われている。社内でも、いろんな憶測があるけどな」

太った色川良雄氏は、橙色の油の浮いた辛そうな坦々麺をずるずると啜ると「ほおっ」と言いながらハンケチを取り出し、額ににじむ汗を拭いた。大きな意地の悪い赤ん坊のような童顔で、頸にむっちりとした肉がせめぎあっている。興が乗ってくると自分のことを「俺様」と言う癖があった。

汗っかきなので、寒いのにあとからあとから汗がふき出る。

「というわけで、羽木。お前に会長の自分史のゴーストライターを、頼みたいんだ」

僕は、自分史になぜゴーストライターが必要なのだろうかと言った。

「幾つなんですか、その会長」

「確か大正四年だか五年生まれで、八十歳かな。終戦の時は、だから三十歳前後か。いやもう、元気なんだなこれが。いわゆる企業における老害ってやつだ。呆けているんだかはっきりしてるんだか、よく分からない。わざと呆けたふりをして、あとで部下を制裁するということも平気でやるしな。奴さん、戦争中は関東軍への物資調達だの土木工事の請負いだったので、さんざん一儲けしたらしいんだ。日本に帰ってからの土建業の基礎固めは、その頃できてたわけさ。そのせいか、敗戦のときは新京で、隠れ潜んでいた地下倉庫室から引きずり出されて、現地の連中に袋叩きにされたという話もある。もっとも現地ではアコギな仕事も沢山やったと言われてるしな。あの面構えは、それなりの……」

「つまり、あまり近代的な企業家というタイプじゃないわけだ」

「全然。この前のゼネコン汚職のとき、よく引っ掛からなかったと思うよ。爺さん、今でも国会証人喚問の夢にうなされてるといふ笑い話があるけど。談合体質そのものだからなああの会社も。業界では、準々大手程度の地味なゼネコンということになっているが、政治家ともかなり変な噂がある。戦後に続く満州人脈だよ。そうそう、以前、ある経済誌で、丹下喜作が大陸時代、旧七三一部隊の施設の土木工事を下請けをしていたとか、特務機関のために人攫いまがいの行為をし

たとかいう記事が出たけど、いつの間にか立ち消えになったな。ガセかどうか確かめる余裕もなかったらしい」

「金でも動いたんですか」

「そんなとこだらう。満州政府周辺のうさん臭い何でも屋の一人だったということは、確からしい。しかしどうやら奴さん、ここに来てなぜか自分の過去を語りたくなってきたみたいだ。あの人、まともな経営者だったら墓穴を掘るような話でも、平気で披露するんだから笑っちゃうがね。ま、核心部は言わないだろうが。喜作爺さん、あれでひとかどの国土のつもりらしくて、政治家や大物右翼、演歌歌手なんかと親しいことは、ことあるごとに吹聴したがるんだ。とにかく、虫の好かねえ因業爺じいだよ。俺も二度ほど会ったがな」

喉が渴いてきたので、水を一杯注文した。店のアルバイトの女の子は、中国人らしいが、化粧つがなくてちょっと可愛い。外は冷え、牛乳を溶かしたような雲が広がり、いまにも雨が降りそうだった。

「ところで、忠告しておくが、何があっても会長に反論するようなことはしない方がいいぜ。あそこはひでえ同族会社で、娘婿の社長をはじめ、幹部連中は腰の抜けたイエスマンばかりだから、あの因業爺じいに文句を言う奴なんて、一人もいやしないんだ。おい羽木、お前だって、金は欲しいだろう。これは口約束だが、巧く書いてくれたらお前の去年の年収の半分程度のギャラは考えておくと言ってきている。またヤケをおこして、仕事を途中で放り投げられたんでは、紹介するこっちの顔も立たないからな。いかげんに、人生で忍耐というのを学ばねばね、キミも」

「言い返したり、しませんよ僕は」

仕事を紹介してくれるのはいいけれど、色川さんと会う時は、いつもこうして説教される立場になってしまうのだった。それに、この前の時は僕が途中で仕事を放り出したのではなく、色川さんの聞き違いでトラブルが起こり、先方から断られてしまったのだ。もともと色川さんにとって説教できる相手は、僕ぐらいのものだ。つまり僕はいやいやながらも、いつも寛大な弟分の役割を演じているのである。

中華料理店の褐色の店内には、列車が通る度に微かな振動がひびく。彼のぼってりした大顔と黒光りしたクセ毛を見ながら、相変わらず鬱陶しい人だと思った。しかし別に嫌いなタイプではないし、彼の生活力の逞しさには学ぶべきものがある。彼は四谷のマンションの一室で友人と編集プロダクションをやっている。息が浅く、いつも動作がせかせかしており、食べ物には目がなくせに、糖尿気味であることを気にして健康雑誌を手放さない。四十をいくつも越しているはずなのにまだ独身だった。

「若いうちは、お前さんみたいに愛想なしでも、愛されるもんだ。ところが俺ぐらいになるとだ、犬のように愛想が良くないと、なかなか人というものは、相手にしてくれない」

「分かりましたよ。でも偏屈そうな年寄だなァ。そもそも、何で自伝の出版なんですか」

「そんなことは、どうでもよろしい。ニーズがあるんだからニーズが。ま、聞いた話によるとだ。喜作会長のライバルである倉林建設の会長が、米寿を祝って『わが達磨人生』とかいうタイトルの自分史を出版して、えらく評判がいいらしいんだ。それで触発されたみたいだな。丹下喜作が陰性の白髪鬼だとすると、倉林尚蔵は、達磨によく似た陽性の爺さんだな。この人、ちなみに

業界の裏の調整役らしいんだが」

「年とると、そんなに自分を語りたいもんですかねえ」

「知るかそんなの」テーブルを叩いて、吐き捨てるように彼は言った。

「あんまり人を質問攻めにしないことだ。人間は、可愛げがなくてはいけない。俺様なんかこの顔で、結構、得意先に愛される理由は、何を言われても、たちどころに感心した顔ができるからなんだ。丹下会長もこれまた、殊の外自分に感心してくれる人間が大好きなんだ。実は最初、この自分史の仕事は、ある経済誌の編集者に声がかかったんだが、取材を進めていくうち会長と言合いになって、降りてしまったんだ。俺の知人の一人だがね。つまり、妙な問題意識を持っていたり、まともな反骨精神がある奴はダメだということだ。そこで先方の幹部会議での結論としては、若い、素直で純真な、まっさらなライターがいいということになったんだ。一安心しな」

「要するに、まともな神経を持ったジャーナリストじゃ、務まらない仕事というわけですね。僕みたいに、批判精神のないライターの方が、好都合なんだ」

僕は無然として、口を尖らせた。

「分かりましたよ。やってみますよ」

「察しがいいじゃないの。己を知っているいい奴だ。肩を揉んでやろう。……ところでキックバック、忘れるなよ、会社とは別に。ともかくだ。お前さんに欠けているのは、営業センスだ。愛想だ。――ぜひやらせてください、いやもう会長のような方の自伝でしたら、わたし自身の人生勉強にもなることですし、お金の問題は別として、むしろこちらから頼み込んでやらせて頂きたいほどです。なッ。大人なんだからそのくらい、言えないもんかね務クン」色川さんは、哀れむように僕を見た。

「バブル経済崩壊以来」とラーメンの箸を振りかざしながら、彼は宣言した。「世間は厳しくなってきた。甘っちょろいことは、言ってもらえん。取材インタビューは、明後日。きちんとネクタイ締めて、遅刻しないで行けよ。以上」

カウンターの中で、大きな炎が立ちのぼった。炎は一瞬、明るいオレンジ色のお化けのように広がった。痩せた主人が、フライパンで餃子を炒めているのだ。

色川さんはふんぞり返ると、財布を出しかかった僕に対して「ま、ここはいい」と制した。

彼はにこにこしながら中国人らしいレジの女に近づいて、猫なで声で「キミどこから来たの。上海？」などと言いながら、支払いを済ませた。

商店街の後ろに控えた寺の境内には、夥しい柿があかあかと実っていた。幾つかの実が、鳥たちの鋭い嘴によってグサグサにつつかれ、赤い果肉を晒していた。白く澱んだ雲がゆっくりと重なり合いながら移動し、空は陰鬱な銀に輝いている。色川さんは、ティッシュを取り出し、大きな音を出して涙をかんだ。額のところで半分カールしている濃くて黒い髪をかき上げると、歩きながら真顔になって囁いた。

「ああいう子でも、いいんだがね」

「何がです？」

「結婚だよ結婚。いまの店の女。俺はこれでも、あのラーメン屋には六回は通ってるんだ。さっき、チラッとこっちを見ただろう。なっ、気がある証拠だ。ああいうアジア系外人のほうが、

案外日本の女なんかよりも、情に厚いかもしれない。何しろ奴らにとっちゃ、日本の男は、憧れの的だからな。そのために我が国に来ている奴もいるらしい。こうなったらもう、中国人でも、フィリピン人でも、タイ人でもかまわないんだ。俺様はこう見えても、人種的偏見はないつもりなんだ」

いい気なもんだ。彼のような見方こそ、無意識な差別ではないだろうか。もちろん色川さん相手では、向こうから断ってくるだろうと僕は思う。

しばらくして、風景は灰色にくすみ、白い路上がぼつぼつと黒い点で染められていった。

寒い。道路工事のため、駅に行くには路地を迂回しなければならなかった。

ふと途中の路地裏の建設現場を見ると、コンクリート基盤の上の仄暗い檻のような鉄骨の周りに、子供たちや買い物籠を下げた主婦などの人ばかりができています。

覗き込むと、鉄柱の天井から、黒い小さな蝙蝠傘のような塊が吊るされ、バサバサともがいて鉄骨にぶつかっている。ときどき歪んだ声でガアと鳴くので、鴉であることがわかる。

片方の脚に、鉄条網が巻きつけられて、鉄骨の端にひっかけられているのだ。

黒紫色の羽がだらしなく開かれると、緻密に並んだ羽根が団扇のような放射状の綺麗な線を描く。水色に瞬くガラス玉のような眼だけが、不安の色を帯びて注意深く見物人を伺っている。

足元で白いプードルが一匹、小さな体を跳ねさせながら、しきりに吠え立てている。二人の大学生ふうの若者が左右から手を伸ばし、針金を掴もうとしているが、もう数センチのところまで届かない。

見物人たちは眉を顰めながらも、面白がっていた。

近所の子供の仕業にしては、手が込んでいる。「悪趣味な悪戯だな」色川さんは、楊枝を動かしながら呟いた。僕たちは駅に急いだ。

(2章に続く)

2章

<http://p.booklog.jp/book/97692/read>

『建築家の檻』

1 丹下会長は片腕のない白髪鬼で...

<http://p.booklog.jp/book/97575/read>

2 そして、戦艦のような建物の中へ

<http://p.booklog.jp/book/97692/read>

3 第一印象で、もう落第

<http://p.booklog.jp/book/97717/read>

4 前途多難。白髪鬼からのヒアリング

<http://p.booklog.jp/book/97734/read>

5 父親殺しの建築家。旧左翼ふうジャーナリスト

<http://p.booklog.jp/book/97775/read>

6 満州で馬賊の親分になりたかったのさ

<http://p.booklog.jp/book/97814/read>

7 「ハルピンの悪魔城」を思わせる私邸には

<http://p.booklog.jp/book/97885/read>

8 最高会議は家族会議。妄想のユージェニクス

<http://p.booklog.jp/book/97960/read>

9 大陸での忌まわしい出来事。ルイーズ・ブルックスと佐伯祐三

<http://p.booklog.jp/book/98117/read>

建築家の檻

<http://p.booklog.jp/book/97575>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97575>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97575>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ